

## 表紙, 目次, 漫録

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38494">http://hdl.handle.net/2297/38494</a>

明治四十一年十二月二十五日發行

# 十全會雜誌

第五十二號

（非賣品）

全澤園學專門學校十全會

# 十全會雜誌第五十二號目次

○原著及實驗……………自一頁

○精神感動ノ食欲ニ及ボス影響ノ

試験的研究 (附、四表)

特別會員 佐々木 達

○肥大性脊髓硬膜炎ノ一例

特別會員 勝木 直吉

○浴中聽診ノ診斷的價値

特別會員 岡本京太郎

○Kwariams

特別會員 岡本京太郎

○異常頭蓋ノ一例ニ就テ (附、一圖版二圖)

特別會員 中野鑄太郎

○半陰陽ノ一例

特別會員 秋山八百藏

○漫 錄……………自二三頁

○三年級々會那谷紀行……………吉田 二芳

○名無草……………默鐘子—翠流

○葛紅葉……………雲外—翠流

○山家より……………白 雨 生

○會 報……………自二九頁

○叙任及辭令其他○卒業證書授與○十全會大茶話會○新卒業生○卒業生諸君を送る○弓術部秋季大會報告○前雜誌部委員伊藤、池部、兩兄を送る○本校規則中改正二件○解剖屍跡追弔法會○小松原文相の來校

○會 告……………自四二頁

○明治四十年度十全會會計報告○寄贈及交換書目○十全會費納付調書

○前號附錄「噫小川先生」中の正誤

○廣 告

○數 件



漫  
錄

○三年級々會那谷紀行

吉 田 二 芳

十月一日の朝まだき停車場前のアーケは身を切る様な冷かな光線を放つて居る、其影を三々伍々黑影が歩いて来る、言はずも知れた我が三年級の同胞、今日の紅葉狩りの勇將である。黑影は物を言ふ。

「ヤ―た早う、僕は昨夜十二時過ぎに寝たんだが今朝は三時に目が覺めた、早速戸を開けると、果然、曉天の星は銀河にこぼれてる」

「オー君か、僕も實は三時に起きたんだ、早速便所へ行つて見れば……………殘月一痕手洗鉢に映じてる」

「ハ……………だが君、黒合羽の外套は振つてる子、矢張り旅行家は違つたもんだ」

これで文章家らしい話は一先づ終つた。黑影は黑影を産んで今や黒山となつた、暫くすると黑影の比較的長いのが又口を開く。

「元來、學校では餘り遠足などはやらん方だが、學校としての遠足は大いに必要で且つ興味深いと僕は思ふ」  
「さうだ確に陸上運動會以上だネ」

「級會としても左様だ、ピクリン酸の教室や濟々堂とはまた別趣味だね」

愉快な會話は一團の黑影から自由に繼續して起こる。

鐵路の上にはエンヂンのきしる音、水蒸氣の吐き出す音が勇ましく曉の寂漠を破つて居る。やがて刻むセコンドは四時五十分をさして一行六十三の黑影を豫定の箱に入れた。

級長宮田教授及び石川教授などの一行は次の列車に來られるので一同は尠からず落膽した。が例へばガスの薄暗い活動寫眞の様に移り行く左右の景は又特別である、海の香近い朝の空氣はオゾンを含出して居る、全身を循環する酸化ヘモグロピンは大なる活力に變じ一行は已に吟詩歡樂の中に遠慮なくエチルギ―を消耗して居る、沿道の茅村からは鷓鴣曉を告げ、匹馬風にいばいてこれ又徐ろに活動の端緒を示して居る。

水瘦せたる手取川の海に注ぐ處、何龍橋、小舞子の松は波荒き日本海によつて既に其名がある。曙光は東天を彩つてやがてロハの光線を海に投げんとして美しさ筆にし難い。われ八仙の風韻なしと雖も瀛車の窓から首をつ

き出し、あゝ何とも言へぬ所が何とも言へぬと興がる位の資格はある。

小松驛の下車は六時近い。改札口を出た一列は何時しか小コロニーを作つて自由行路をとつた。

闕巷はまだ朝餉前の景である。

郊外に出れば水平な路に松並木が窮屈さうに枝を交へて居る、流石は百萬石の昔が床しい。栗毛の駒に具鞍たき、朱塗裏金の陣笠を冠つた武者が大刀を腰に帶し手綱を把つてトツ／＼と燕林式に繰り出したら面白いであらうと思ふた。

「ズツと向ふに丈較べして居る藁屋根は何とも言へぬ趣がある、脂肪や石炭臭い外國とは餘つ程衛生的だ」と誰やらが言ふ。

「矢張り野に置け蓮華草だよ、何でもかでもハイカラ振つて薩摩芋へバタをつけても初まらぬ」と竹庵君がつけ加へる。

「アノ向うの荒れた白壁は何だらう」

「あれは村の隔離病舎さ」と旅行家は平凡に答へる。

「北里博士が見たら泣くだらう」と未來のドクトルは嘆聲をもらす。

黄鷄黍をついばみ去つて秋の日和麗かである。

「マア今日は三年級デーと言んだら、こんな日に蟄居し

て居るものは丸で忌酸菌だな」

「何れテタヌス菌の マツイ だろ……………百姓は体格がいゝ筈だ」と色の白いのが感心する。傍から百姓面が

「今年は幾粒位あるかしらん……………一穗に」と言ふ。丸でイブセンの頭の白髪が何本あるだろと言ふのと同じだ、鳥なく都人には一向御存じがない。

一里半の行程も談笑の間には足が軽い。村の端、田の中に十町に一基程づゝ「彰忠魂碑一が巍然として威嚴を保つて居る、其はとり白菊は半ば枯れて陽

炎が見ゆる、一行は目禮して過ぎた。木場瀉、柴山瀉、今江瀉鼎立の三湖臺の景はこの近くである。「歸りだ歸りだ」と誰やらが言ふ。

那谷に着いたのは九時前後であらう、先發隊は既に景又酔ふて居るらしい。洞窟拜見御希望の御方は當山へ云々と門に掲げたる古刹(舊嚴谷寺—養老元年泰澄の開基)を左に見て、椎の葉影に苦むす燈籠を數へつゝ石疊をすべり行く、神氣は身に迫つて來た。

忽ち、芭蕉翁が石山の石より白しと詠んだ懸崖峭壁の大舞臺が目を遮る。丸で文晁の書いた山を油繪にした様である、懸崖の裾には對照的に古池が廻つて居る、藍色の水が湧かず流れず溜まつて居る、丸でバクテリアンのチールボーデンである、しかし場所が場所だけで古い所

に價值がある。顯微鏡やレントゲン線で見れば櫻の花にも蝶の糞が散つて居る。其池の中央に鳥があつて石の鳥居と小さい祠がある、寒軒雀羅を啣つ姿である。

地には椎、樺、銀杏、松、杉が古き歴史を語つて居る、紅葉は漸く一霜を浴びて、エオヂンから弱アルコールの中へ入れた色である。

視野の右には鋸齒状の石階が觀音堂に續いて居つて其登り際に三抱程の椎の樹がある、翳鬱として幽邃閑寂仙境の趣がある。ふりかへれば足元に紅葉の血しほかゞれる石文が見ゆる、戻る氣は暮れてもつかず花の中。これは更隣宗匠の句だが其意味は分らぬ。

一步踏み出せば一峰現はれ、十歩登れば十峰眼に入るとは適句だと思ふた。堂は朽ちて上から巨巖で壓せられて本尊はこの龕窟の裡にござる、一行は鐘を叩き合掌三拜して心念を清めた。

猶ほ人柱を作つて登ると、神工鬼斧の洞穴につき當つた、石佛が數体譯もなく立つてござる。羽化登仙の一行は罪のない話に笑い興がる、下から聞くと虎の號ぶ様だと新しい仙人が言ふ。俯角十度、堂の屋根には百舌が物を食んで居る。時計は十一時近い、ソロ／＼若い仙人達は腰から圓いの或は偏いのを出してパクつき初めた。衣食足つて禮節を知るの主義だと見ゆる。

路を右に轉すれば奇峰怪岩を踏んで池前大雄景の頂に達する、岩を掴んで俯瞰すれば紅葉は焰と燃えて池に化粧して清幽の趣を極めてる、透下光線では池に鯉も見ゆる、角帽も三つ四つ倒に見ゆる。

地に降りて飽かず再び見上げれば峭壁は雜木の紅葉を挿んで、鎧武者が花簪を髷した様である。われ林間に紅葉を焼いて酒を温む風流なしと雖も、巻縮を頬ばつて獨り景を楽しむ、友は石に踞して山堂の奥を照す紅葉の枝振りスケツチる、今の若い御方は理窟なニーと柿賣の婆さん感に入る。時雨に叩かれた枯葉は靜かに椎の實拾ふ少女の袖に落ちた。

那谷の景はまだ／＼盡さぬ、けれども他凡ては隨從的である、寫眞の臺紙である、新聞附録である。

正午三十分 scenery を惜んで去つた、途上宮田教授、石川教授、佐々城助教、四高の獨語教師スタイナル先生に會した、

ヤー今日の御客様は面白いよと粟津に急ぐ。粟津が野は平凡に起伏する一帶の山の間に、米を以て満たされてる丈けで特色はない。

會場は山本屋の奥座敷である。先發隊は已に公園を逍遙し去り、温泉に疲れを流し蒸草魚の様になつて怪氣焰を吐いて居る、茶を喫して居る、碁を圍んで居る、續々と

後着隊が加はり又甲論乙駁面白い話柄が持ち出される、繪葉書の批評が出る、スタンプの巧拙論が出る、顔の赤さを比較する。

暫くして先生達が貴臨せられた、一同はホク／＼もので、顔を斜に向けた、視線はスタイテル教授の鼻の尖端に集まつた。煙草一本吸ふ間に

愉快な級會の幕は開かれた。拍手の音は急霰の如く起る、我が級の張儀馬詰氏は開會の辞を述べた、例によつて急行列車的である。次に級長宮田教授は座を進まれ御丁寧な御挨拶に續いて、鳩翁道話中の一節大根賣りの良心について興味ある感想を述べられた。恰も慈父の嬰兒を諭す様である、一同は砂漠の中で清水を灑がる／＼思ひがした、あゝ實に潔白なる良心なかりせば、人生は塵に歸るべき塵であると思ふた。アリストクラトの先生は又偉大なる徳の權化である。大喝采の裡に先生の席はスタイテル先生に譲られた。教授は我が級會に大なる光彩を添へられたのである、精悍なる獨逸語は今や狡猾なる乞食の物語に轉じた、ドクトルの未成品は天井を睨んで傾聴して居る、話は益々佳境に進む、*Twei Brote kosten ein Sant Ein Brot kost nicht* の所で笑聲堂外に溢れた。拍手は鼓膜を破らんばかりに起つて石川教授は續いて起られた。風采謙温、辨論風生皆謹聽して居ると、た話は

單に一言の御挨拶で案外早く終つた、例へば雷光あつて雷鳴なき夏の霄である、蓋し穗に出でぬ青田の稻には偉大なる活力を興へる。暫くすると幹生諸氏の御苦勞の籠つた、桂月堂の菓子が運ばれる、宮田級長から賜つた柿が行列をする、茶が注ぎ足される、各々異なつた方法のもとに食ひ初めた、骨肉は無邪氣である。

談笑は再び起つて櫻月もる春の氣は場内に満ちた、餘興／＼と言ふ聲の中から深谷氏の琵琶歌が始まつた、曲は送別、時は秋、悲鳴するが如く、慷慨するが如く斷腸するが如く戀々として絶えぬ、一堂の了伯は才を横へ目を瞑して無限の感に打たれる。

突如夢より返れば恍惚たる視線は高安校長の温顔に一致した。一同は幻視だと思ふた、神經の異常亢奮だと怪んだが……非ず／＼先生はこの小春日和を自轉車で一行を追ふて來られたのだ。一同は先生の御好意に感謝し、自轉車の早さに驚いた。先生の御挨拶は喝采を以て依而如件と結ばれた。

かくて今日の級會には錦上數朶の花を飾つたのである。稍あつて馬詰、黒田二氏の落語があつた、一同は臍茶を衰やした、蓋し二氏も亦我が級の大恩人である。

盡させぬ歡樂の間にも時は進んで、閉會したのは四時

夕日は山にかぐろう頃であつた。一行は再び旅装を整へて自由な歸路に就いた。

夜七時二十七分の小松發列車は七十二の温い夢を載せて、闇を縫ふて走る、月は峰儿としてこれを保護して居る。(完)

## ○名無草

默鐘子

人の世の情なき折ろ思ひ出で、み天の母を戀ひ渡るかな。油買ふて下宿に戻る夕暮のやつれ姿に風寒きかな。尋ね來し母に別れて秋雨の工場窓に袖噛む子哉。乗合の替女がすさびの一節に涙覺ゆる秋の夜の月。馬賣りて空しき厩こほろぎの鳴くにまかせる小木曾路の宿。奏てけむ昔嗟峨野の想父戀々、る覺ゆる秋の夜の月。秋の窓木の葉まじりに時雨して俤にのみ人戀ふわれは。

### 出郷の前夜

明日よりは旅路の空に住まなんに思はせ振の今宵この月。

### 人に代りて

可愛くもわが子に似たる順禮の咏よんで行く町はつれかな。

翠流

今しばし語れよ君が歸らんと云ひ出し故時雨となりぬ。

前額のみみじき傷を新妻にはこりて吾は冬ごもる身よ。正宗のあきたる體にいさゝかの菊匂ふなり病みあつむ窓。君がある都の事を君が母の間はせ玉ふよ君雪の夜を。丈高き娘とひくき母人どそゝろに行くよ小春野の寺。戀もなき折を遊びし神の銀杏大さうなりて今落葉する。書を顔にあて、夜長をねむりたる油煙の黒う紙に落けり。千仞の谷の底より響く如きかすかな答君はちざりぬ。烙鉄に水を、がるゝ如き思ひ我はうらみぬ我戀し君。

## ○蔦紅葉

雲外

風なくてばさりと落る梧葉哉  
紫に河北瀉晴れけり燕行く  
木の葉焚く煙のはてや秋の空  
朽かけた水車に秋の夕日哉  
行く秋の梢に淋し柿一つ  
山寺や菊の香通ふ松の風  
酒さけて雲助ゆくや夕時雨  
蒼空の鷺一点や夕紅葉  
豆腐買ふ鉢さし出して霞かな  
山茶花のよごれて咲や藏普請

翠流

風のさらけ出したり河北潟  
寒さかなあご髯のびて約六分

○山家より

白 雨 生

飴吸ふ眼白一羽、低調の聲立て、何處へか去れば、梢  
ゆれて花二つ墜ち申し候。

連日の雨止まず。濕りたる土は、椿の花うづ高く候。  
見やる彼方、麥延びし事四寸。畦道を挟みて、黄は菜の  
花に御座候。小川隔てし春の山は、うら若き装の人に見せ  
じとや、心にくくも、霞の帳に隠れ申し候。されど美き  
鳥の囀のみは、さすがに洩れて候らへ。午後貳時半。

夕方より更に筆つゞけ申し候。語ふ友もなく、取り散  
らしたる六疊の真中に、手あたり次第、書籍と云はず、  
雑誌と云はず、繰り擴ぐるど、巻煙草の煙、輪に吹きて  
つくねんどそが行衛守るどが、歸省中の日課に御座候。  
なに致せ、植木鉢の底よろしくの山里に御座候へば、隣  
村へも十町にあまる山坂踏まねはならず、煙草も山越し  
て求め居り候。不便利の程御推察下され度候。

狭苦しき峽村、雨のまゝに暮れ行けば、温さと濕氣と

が、交りたる重き調子の春宵と相成候。一刻千金の値は  
扱置き、一種云ひ知らぬ氣韻室を襲ひ來りて候。午後八  
時。

清瀨枕に近く、唳かなる河鹿の聲、ホウ／＼と訪づる  
も風情と申すべくや。夜は更け申し候。雨烈しく、軒  
の雨滴せわしげに候。かゝる夜は、音樂のたしなみもが  
など思へど、今更追付かず、例の默想にふけり申し候。  
午後十一時。

細雨に花うなだれぬ薄紅は恨みかあらずはぢらひし様。  
陽炎や桃開く村の麥の末犢牛幾つが牽てぞ行かる。  
淋しみは世を領じたり頼杖して魂のあへぎも聞かる、  
夜かな。

高殿の御燭ほそりて雨の夜を局にかへる衣ずれの音。  
御徒然の時もやど、三十一文字並べ申し候。もとより  
柄にもなき仕事に御座候へば、拙さ御笑ひあるども、御  
叱は御無用に御座候。  
夜もますます更け候へば、名殘惜しけれど、茲にて筆  
どめ申すべく候。勿々拜具。一時半



○叙任及辭令其他

▲宮内省▼

(各)

(通)

叙正八位 (十月二十日)

(各)

(通)

黑田眞岳

杉本恒治

山崎清吉

坂本信一

海津四郎

猪飼史郎

貴島善兵衛

永井人雄

佐藤武

鈴木修一郎

市川久多

山田茂樹

太田勘市

(各)

(通)

叙正八位 (十月三十日)

叙正七位 (十月三十日)

▲内閣▼

陞叙高等官三等

陞叙高等官四等

林秀雄

原尾肇三

赤原治三郎

栗原治三郎

柿澤雅一

山川宮三

武藤匡一

朝日昊

吉田繁治郎

佐々木靜

大澤誠一

井口爲四郎

寶達佐市

阿部莊二

金澤醫學專門學校教授  
正六位勳六等醫學博士

金子治郎

仙臺醫學專門學校教授從六位

敷波重治郎

陸叙高等官四等  
京都帝國大學福岡醫科大學教授從六位醫學博士  
高山正雄  
(以上、十月二十七日)

陸叙高等官七等  
石川縣技師正八位  
越野義三郎  
(十月二十九日)

任金澤醫學專門學校教授  
叙高等官七等  
(十月三十日)  
加藤靜雄

▲文部省▼

九級俸下賜 (十月三十日)  
教授 加藤靜雄

▲陸海軍省▼

步兵第三十六聯隊附陸軍三等軍醫  
免本職補金澤衛戍病院附  
陸軍三等軍醫  
伏田金三

補步兵第七十聯隊附 (以上、十月七日)  
近衛步兵第三聯隊附陸軍三等軍醫  
陸軍三等軍醫  
吉田繁治郎

免本職補近衛工兵大隊附  
步兵第八聯隊附陸軍三等軍醫正  
山田伊之助  
村田醇

免本職補步兵第四十二聯隊附兼山口衛戍病院長

步兵第三十九聯隊附陸軍三等軍醫  
免本職獨立守備第六大隊附被仰付 (以上、十月二十二日)  
羽田公太郎

免本職補第十三驅逐隊附  
舞鶴水雷團附海軍中軍醫  
伊藤顯徳

免本職補第七驅逐隊附 (以上、十月五日)  
吳水雷團附海軍中軍醫  
長井運男

▲石川縣▼

依願職務ヲ免ズ  
金澤病院醫員  
白井丈吉  
(十月三十一日)

▲本校▼

依願雇ヲ解ク  
雇 宇野益之  
職務勉勵ニ付慰勞トシテ金四拾貳圓給與 (以上、十月二十日)  
雇 宇野益之

雇申付 (十月二十一日)  
大島順

依願課員ヲ命ズ  
內科學副手ヲ囑託ス (十月二十八日)  
樋口平次

眼科學副手ヲ囑託ス (十月三十一日)  
田中基保

名取博三  
梶川靜夫

各)

(通

內科學副手ヲ囑託ス

外科學副手ヲ囑託ス

(各通)

眼科學副手ヲ囑託ス

(各通)

産科學婦人科學副手ヲ囑託ス

(以上、十一月十四日)

體操副科弓術教授方ヲ囑託ス

內科學副手ヲ囑託ス

(以上、十一月十八日)

依願囑託ヲ解ク

(十一月二十一日)

內科學副手

- |       |       |       |        |        |       |       |       |        |       |       |       |        |       |       |       |
|-------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|
| 山崎 太一 | 河口 賀真 | 八島 爲晴 | 赤祖 父廉三 | 馬庭 駿一郎 | 池部 正鑿 | 月岡 勝治 | 太田 得郎 | 金平 鍊太郎 | 山崎 太一 | 酒井 碩治 | 服部 暢介 | 加藤 健之助 | 藤崎 榮吉 | 福田 美明 | 杉下 孝造 |
|-------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|

産科學婦人科學副手ヲ囑託ス (十一月二十四日)

佐竹 清吉

### ○卒業証書授與

十一月四日午後一時本校濟々堂に於て、醫學科第二十  
一回、藥學科第十九回卒業生への証書授與式を舉行せら  
る。正面机上の菊花は、其艶、其の香、以て本日の光榮  
を彰し、窓間の國旗、天井の彩旗は、其華、其麗、以て  
本日の餘榮を表す。先づ場の中央、卒業生席を卜し、學  
生堵をなして、其の背後に立位す、第一鈴によつて卒業  
生入場亞で職員一同着席、証書授與に先たつて校長は恭  
しく本年十月十三日下詔の成申詔勅の奉讀あり、吾人最  
敬禮以て聖詞を拜聽す。

### 詔書

朕惟ふに方今人文日に就り月に獎  
み東西相頼り彼此相濟し以て其福  
利を俱にす 朕は茲に益す國交を  
修め友誼を醇うし列國と共に永く

其惠に倚らむことを期す

顧るに日進の大勢に伴ひ文明の惠澤を共にせむとする固より内國運の發展に俟つ戰後日尙ほ淺く庶政益す更張を要す宜しく上下心を一にし忠實業に服し勤儉産を修め維信維義醇厚俗をなし華を去り實に就き荒怠相警め自彊止まざるべし抑々我神聖なる宗祖の遺勳を我光輝ある國史の成績とは炳として日星の如し洵に克く確守し碎礪の誠を輸さば國運發展の本近く茲に在り 朕は方今の世局に處し我忠良なる臣民の協翼に倚籍して維新の

宏猷を恢弘し宗祖の威徳を體揚せ

むことを冀ふ爾臣民其れ克く

朕が旨を體せよ

(謹寫)

纏て校長、再び上ちて、証書授與の宣言を下し、名譽ある卒業生は、一々うけて座に至る、次で優等卒業生に對し特に銀時計の賞與に入り、醫學科卒業生伊藤哲一、同加藤健之助、藥學科卒業生上遠野與作の三氏、場内の視線を浴びつゝ順次復席するや、校長悠然、熱誠の瞳を放ち、剴切なる告辭を玉ふて、曰く、

諸君ハ今日首尾能ク本校ヲ卒業シ今日名譽ノ證書授與セラレ誠ニ喜ニタヘヌ次第デアル。コレト云フモノモ、諸君ガ拮据勉勵ノ結果ニ外ナラヌガ、本校ノ之ニ向ツテ又力アルモノトセザル可カラズ、今日諸君ハ、証書ヲ得ラレタノハ、旅行免狀ヲ得ラレタ様ナモノデ、今日迄ハ窮屈ナル學校生活デアツタガ、コレカラハ實ニ自由自在デアル、本日ハ丁度社會ヲ活歩スル旅立ノ祝デアル。然レモ既往ヲ見ルト、諸君ハ三年或ハ四年ヲ費セバ、必ス彼岸ニ達スル豫定デアツタガ、中ニハ不幸ニシテ豫定ノ彼岸ニ達セラレヌ人モアリシガ之モ前ヨリ引キ、後カラ押シ、右

ノ手ヲ曳キ左ノ手ヲ持チテ、扶ケタノニヨツテスベテ所定ノ課程ヲ終ル事ノ出來タ人ハ、實ニ醫學科九十七人藥學科十四人デアリシ、其中同時ニ入學シテ、同時ニ出タ人ハ、比較的多イニ相違ナイガ、三十三年、三十四年、三十五年、三十六年、モアルガ大部ハ三十七年入學デアル、藥學科ハ皆ナ三十八年度デアル、斯様ニ右ノ手ヲ曳キ左ノ手ヲ持チ安全ナル指導者アリシニ關ラズ、或ハ谷ニ入り、或ハ、横道ニイリテ、今日漸ク醫者トナリ藥劑師ト成ラレタノデス。今日ヨリ諸君ハ、最早ヤ手ヲ把ル人バナイ、即チ旅行免狀ヲ與ヘラレタノダガ、然シ學生時代ト異リ非常ニ自由自在ノ様ダガ、學校デハ、只教官ノミガ、試験スルノデアルケレドモ、社會デハ誠ニ澤山ノ人ガ試験ノ眼ヲ放ツテラル、故ニ若シ社會デ落第シタナラバ、ナカ々々恢復ハ出來ヌ故ニ諸君ハ倍々、精勵シテ、今日ノ成功ニ安セズ、今日得ラレタル旅行券ヲ以テ豫定ノ所ニ進マルベシ。元ヨリ諸君ノ中ニハ、軍人トナラル、人モアリマセウ、又官衙ニ身ヲ委ヌル人モアロウ、又自ラ開業シ、又ハ尙研究ニ向フ人トニヨツテ多少異ルガ志ハ皆成功スルノガ目的デアル。愈名ヲ就シ、功ヲ得バ、本校ノ義務ヲ盡シ得ルノデアル、故ニ諸君ハ在學中ノ心得ハ、學校

ノミナラズ、社會中デモ必要ダ又大祭日ニヨム、勅語並ニ今日讀ミシ詔勅ヲ奉體シテ益々勉強セラレタナラバ、目的ノ所ニ達スルニ違イナイ。今日一言以テ祝辭トナス。

場内肅として聲なし、卒業生諸子の頸は少しく前に垂れて其視線は近く床上下あり、あゝ諸君が此刹那に於て其心血が一波瀾し深きく印象を刻んだのでもあるかの様、やがて校長言を改めてのたまはく。

今日諸君ニ喜バシキ事ヲ話ス、兼テ本校ニ於テハ、學士號ニツイテ、文部省ニ申請中ナリシガ、昨日漸ク電報ニテ、本年以後ノ卒業生ハ其卒業學科名ニ從ヒ、金澤醫學專門學校醫學士、全藥學士ト、稱スル事ヲ得、最モ文部省ニテハ、直チニ優待スル考ナリシニテ、既往ノ卒業生ハ詮議中ニテ將來ハ皆出來ウル事ニナリシ也。諸君ハ一層勉メテ稱號ノ改號ヲケガサレヌ様ニセラレンコヲ希望ス。と

卒業生諸子が視線は漸進性に淨ひ來りぬ茲に卒業生總代伊藤哲一氏進んで答辭を呈す曰く

余等本校ニ入りテヨリ茲ニ四年諸教官ノ懇切ナル扶掖教導ニヨリテ辛シテ斯學ノ一般ヲ修得シ今ヤ校門ヲ辭セントスルニ當リ本日ヲトシテ卒業証書授與ノ盛典ヲアゲラル生等ノ光榮何物カ之ニ如カン 現時

我醫學界ハ駸々乎トシテ新面目ヲ開キ歐米ト覇ヲ爭フニ至ル生等ノ責任重大ナリト謂フ可シ余等歡喜ノ情ニ堪ヘサルト共ニ將來ノ研鑽ヲ極力盡瘁セント誓フ

明治四十一年十一月四日

醫學科第二十回卒業生總代 伊藤 哲 一

亞で上遠野氏又確歩を踏みて至り

金澤醫學專門學校今日ヲ以テ生等ノ爲メニ藥學科第十九回卒業證書授與ノ盛典ヲ舉行セラレ校長閣下ノ懇篤ナル訓辭ヲ賜フ生等ノ光榮何等カ之ニ如カン惟ニ生等研學精勵茲ニ三星霜今日ノ榮譽ヲ荷フニ到レルモノ偏ニ校長閣下及教官各位ノ懇切ナル薰陶指導ニ依レリ生等此盛世ニ生ル自今益々専門ニ學ヒシ所ヲ實踐シ斯業ノ發達ヲ企圖スルノ重任ヲ負フト雖モ學淺ク才疎ニシテ内外多事ノ今日尙訓誨ヲ服膺シ奮勵斯業ニ從事シ以テ夙夜砥礪此重任ヲ盡サン事ヲ謹テ茲ニ答辭ヲ述ブ

明治四十一年十一月四日

金澤醫學專門學校藥學科卒業生總代

上遠野 與作

右にて式全く終了したり。

## ○十全會大茶話會

「御目出度う」。

「いやア……」。

「随分得意だ子」。

「イヤア君等の來年をた察し申すよ、まア受験<sup>ウケケン</sup>て見玉へ實際苦しいこともあるヨ」。

「ろうかなア、まア一寸証書を見せ玉へ」。

と証書へ頭をそろへる。

「オイ君御目出度う」。

「オ、僕は、君、こゝへ就職<sup>ユウブ</sup>ことになつたからねエ、又何分よろ……」。

「あア……」。

「あア……ですか、ろれあア御目出度う、と受けたる名刺を衣匣へ納める。

あすこの窓に、もたれ、こゝの柱に、凭りて團一圍、卒業生を圍んで御目出度の安賣。こゝ濟々堂裡、當日卒業証書授與式場を、直ちに流用して、年に一度の大茶話會、無論卒業生が名譽ある離別と、光榮ある新入生諸子が歓迎の意とを、兼ねたる今其開會前數刻の雜沓だ。

「卒業生諸君はあちらへ」と、茶話會委員が甘き誘導は、卒業生諸君を疊の上へ奪ひ去る。吾は身体をぐるりと向

きかへて、正面に直る。もう三時だと、時計の蓋をバチリとさせて、薄べりの上に大胡座をかく。初めは、一筋二筋と登つた葺の煙の今は室に満ち／＼と隙々たり、遠く壁間にかゝげたる諸先生の寫眞はボンヤリとして。もう、初まりそーなものだと、益々頸が伸びる途端、拍手急散彈の如しだ。委員長阿部莊二先生立ちて開會の辭を宣へ給ふ。

「これから會を啓きます、會場が靜かになる。」

「特に卒業せられたる人には、一生涯紀念すべき目出度き日なり、十全會も年に一度の會を開いて祝ふのです、(贊成)故に、共に、元氣に活潑に面白くす可し、尙本會は卒業生の送別の意もあるが、新に入學せられた人の歡迎の意味もある、そーすると卒業生はソー云ふ新入生の歡迎會を開くと、即ち二分の一しか歡迎の意味ない會にて、豫期せしより半分の誠意を以て送られる様な氣がするが、之は、かゝる意味でなし此會の半にて卒業生を送り、新入生を迎ふるで莫く、此會は二倍せられし也、此れは二倍の意なり、新入生も卒業生を送り、在學生も卒業生を送り、ごちらも容子振らず、隠し藝などいしごしやられたし、尙二三年は其中堅となつて慾シイ。一言開會の辭となす。」

實にそうです、卒業生諸子は、再び家族の膝を交へる事が出来ないのです、エム、エーの角帽は、恐らく再び被れまい。左様思へば又なつかしき情義も起りませう、吾等の隠し藝も亦目に掛けるさア。諸君も御遠慮なしにどーぞ。

再び雷の如き拍手が起ると見れば、山崎先生嫣然笑を合んで發壇し玉ふ。

「僕は喋ることは、元來、下手であるが、籤に當つたから仕方が莫い。」

本年は日本全國豊年だそーです、僕は一步の田圃をも持たぬが、百姓も喜ふ、吾人も國家のために歡ぶ、聽く所によれば、我北國地方は余計だろーです、僕は古老に聞くと、未曾有の豊年だと、米のみならず麥も野菜も芋も(哄笑)……實に豊年です、諸君も同感ならん。と水を一口、

「エー我學校は如何と考へて見る、比常に豊年です、豊年も學校としては、開闢以來の大多數なり。又悉く卒業出來た、虫喰もサラ米も出來なかつた、實に豊作極まる。(拍手哄笑) 考へて見ると、從來不作の時もありしが、能く肥料が利いたか、善い地盤が出來た後に出來たので益々よく出來たのだ、出らるゝ、新卒業生も然り又新入生及び在學生も此後出れば即ち其豊

作を期すべきなり、尙これからも豊作をやられん事を希望します。尙僕は不辯だが、此豊作を以て卒業生を祝ひ、諸君の前途を祈るなり。(拍手)

終るや、松村喜一氏壇上に立ち、在學生總代の辭を述べ伊藤氏、又、長身を壇上に運び、簡單遜讓の言辭以て曰く

「吾人の出でましたるは、豪くて出たのでなくて、期日が経ちて第三期分婉です、尙分れるのは、惜しい氣も、うれしい氣もする。猶從來通り何時〜迄も私どもを御見捨なく御教示、御交際を願ひます。吾人も又眞面目にやつて行く覺悟、終に諸君の御健祥を祈る」と。昇壇降壇殆ど應接に違なく高安校長起ちて時計授與に對する説明を解き玉ひいよく余興に移る。

バイオリンの合奏。(石川君 櫻井君)

今迄四角い事に、聞き倦いたる耳は、茲に運る。皆んなが同じい心と見ゆる、頭が同じ方向にむき合ふ、眼光が同じい方向に落合ふ、洋服と紋付が相重りあつて同じ方向へ摺り寄る、柱が邪魔で見ぬからだ。石川君横井君出て、一揖し、ろゝろに其妙調を弄ぶ、幽韻心腦に徹透するが如きものあり。

琵琶歌、川中島。

池田友記君  
卒業生 奥山正雄君

奥山君が研學の傍、修し得たる所、端然として坐し、瞑目をろゝろに唇頭を動かす、音吐朗々、悲愴切々、吾人をして暗涙、川中島の古實を辿らしめしもの、實に警嘆に價すべきものあり。

琵琶、毒饅頭。(全 前 三野村君)

氏、又一入の吟手なるも惜しむべし、其低調、吾人が耳神を動かすに足らざりしを。

講談、柳生二階笠の試合。服部勝雄君

「エー柳生但馬守が、家康公の御招によつて」と流石は、御商賣人、其黄い聲又傾聽すべきものであつた。

菓子配布される、茶が出る。洋燈が點れる。

琵琶、友千鳥。池田友記君

終るや阿部先生立ち、閉會の辭をのべ、茲に本年に於ける大茶話會は、最も満足なる結果の中に結了した、時正に午後五時、月光、淡々吾人が歸路を照して居た。

## ○新卒業生

本年十一月四日卒業せられたる醫學科第二十一回九十七名藥學科第十九回十四名の諸氏が芳名及び縣別左の如し

醫學科卒業

伊藤 哲一(和歌山)  
 名取 博三(山梨)  
 小林 唯四郎(長野)  
 萩野 茂次郎(富山)  
 梶川 靜夫(廣島)  
 小林 進(富山)  
 高木 安治(全上)  
 佐竹 清吉(富山)  
 城谷 隣賢(全上)  
 杉下 孝造(石川)  
 森 彖次郎(全上)  
 駒田 一正(岐阜)  
 梶川 甚一(廣島)  
 太田 得郎(島根)  
 河崎 正雄(全上)  
 楠 正之(東京)  
 鈴木 琢磨(山形)  
 鈴木 啓一郎(島根)  
 岩井 尊宗(奈良)  
 若槻 寬隆(長野)  
 河合 勝(福井)

加藤 健之助(福井)  
 加藤 錠吉(愛知)  
 梅岡 幸三(石川)  
 長久 開一郎(全上)  
 岡 勝重(石川)  
 吉澤 祐寬(全上)  
 辻井 禮太郎(京都)  
 赤祖父 廉三(全上)  
 上木 隆基(福井)  
 福田 美明(富山)  
 宮村 誠一郎(石川)  
 馬庭 駿一郎(島根)  
 山崎 太一(富山)  
 中谷 内善雅(石川)  
 才田 猶次(全上)  
 古屋 與三(石川)  
 田中 三彌(石川)  
 大原 米次郎(京都)  
 今井 外吉(石川)  
 乾 一夫(神奈川)  
 長谷川 愛之亮(新潟)

竹中 精一郎(岐阜)  
 齋藤 銀一郎(岐阜)  
 金子 義長(新潟)  
 寺田 久十郎(東京)  
 大野 留次(愛知)  
 藤井 最正(新潟)  
 西坂 武茂(島根)  
 關根 平(栃木)  
 奥山 正雄(三重)  
 岡崎 虎次郎(和歌山)  
 大西 慶明(愛媛)  
 小田 善壽(京都)  
 吉川 友信(石川)  
 野村 義雄(滋賀)  
 廣瀬 淵龍(滋賀)  
 不破 才三郎(石川)  
 吉田 誠一(群馬)  
 大住 惠(兵庫)  
 早川 清延(高知)  
 島田 義一(群馬)  
 長田 八三郎(福井)  
 尾崎 芳壽(島根)

木越 豊松(石川)  
 内田 理治(埼玉)  
 中川 善松(石川)  
 鈴木 於菟吉(石川)  
 柳原 光之助(全上)  
 鎌尾 萬明(兵庫)  
 小西 孝惠(石川)  
 鷹津 冬藏(兵庫)  
 淵原 隆庵(石川)  
 美原 文二(宮崎)  
 伊藤 春馬(石川)  
 酒井 碩治(長野)  
 赤松 省(兵庫)  
 月岡 勝治(新潟)  
 服部 暢助(新潮)  
 藤崎 榮吉(全上)  
 關川 敬治(石川)  
 河口 賀真(山梨)  
 池部 正鑒(愛知)  
 新谷 成三郎(石川)  
 守部 廉次郎(石川)  
 穂刈 光平(新潟)

岩崎 衷藏(埼玉) 松江 鏌五郎(石川)  
 副田 實成(廣島) 木村 明三(静岡)  
 熊崎 直(愛知) 莊田 芳根(全上)  
 堀 雅壽(埼玉) 竝河 正雄(東京)  
 藤田藤右衛門(石川) 松崎 源次郎(埼玉)  
 松本。文二(東京)

藥學科卒業

吉野 積三(岡山) 上遠野 興作(福島)  
 岩田利三郎(愛知) 津垣 直吉(鹿児島)  
 大岩 小一郎(廣島) 宮野 待之(石川)  
 瀧澤 忠一郎(秋田) 桂 定治(京都)  
 島田 民藏(静岡) 高橋 耕作(岐阜)  
 原 直壽(栃木) 關戸 辰次郎(石川)  
 小林 秀雄(新潟) 伊藤 波盛益(沖繩)

○卒業生諸君を送る

清淨、瑠璃の如き時雨をうけ謹て榮譽ある諸君が別辭を草す。

卒業生諸君！諸君が榮譽に對する祝辭は實に諸君が耳底に聞き倦かれたでせう歡喜極りなき御眷族は言はずもがな、情交限りなき知友の祝詞、訓戒交りの學校の祝

辭、下宿屋の御神さんが「オヤマア」御目出度う……」より、果ては新聞紙上の冷かなる批評に到る迄實に諸君が此榮を遺憾なく表示するものである、諸君又幸運兒です、犬猫尙言葉あらば、諸君が新しき背廣の前に、グツドモルニング位の撻揆はなし得たであらう。實に諸君が今日の名譽は偉大です、而してそは學生生活に於ける最後の名譽です、吾人、後進、諸君が煩を省みず、尙、聊の祝章を附加し、併せて別意を彰表せんと欲する所因です。

諸君、諸君が今日の榮譽は、實に、過去四ヶ年に於ける諸君が切磋琢磨を連想せしめ、諸君か今日の光輝は、實に過去三ヶ年に於ける精勵修養を想起せしむるです。而して諸君が耐忍練磨の功果空しからず、今や新學士の肩書の下に、社會の活舞台に、其一步をふみ出されたのである。實に諸君の名譽は偉大です。諸君の榮譽は絶大です。然れども諸君諸君が表示すべからざる絶大の名譽の後には、又絶大なる責任が、附隨して居るです、諸君か比肩すべからざる、偉大なる榮譽の裡には、又偉大不言の覺悟を捉して居るです。看よ諸君、悲惨なる生存競走は宇宙のあらゆる部分に於て、演出せられつゝあるです、一物相觸るゝ所、一團相接するところ、而して其最大なるものを以て、吾人人類對宇宙となすです、實に諸君吾

人類の旗幟は、恒に宇宙の一角に樹立して居るで、而して有らゆる自然の敵は、吾人が蚕食を逞うして居るで、而して、此間處せんとする諸君、諸君は出て、は敵陣を攪乱するの勇將たらざる可らず、入りては守衛の謀將たらざる可らざるで、諸君が閃刀は、能く病魔の毒牙を制しうるで、諸君が一匙は克く病魔が威力を壓し得るで、實に諸君が天職また偉大です。宏大なる責任は茲にあるで、決死の覺悟もこゝに存せりです。諸君が名譽また其裡に包含せらるゝです。諸君、諸君はかくの如き責任を以て、かくの如き覺悟を抱いて、以て、奮闘の人となられたのです。故に諸君は、今の成功に安せず、益々精勵以て社會の期待に應へ、今日の名譽をして、ますます發揚せられん事、實に吾人の切望に絶へぬ次第です。

ア、吾人が日夜の扶掖を享け、誘導を垂れ給ひし、諸兄は、決然として、吾人を捨てられたのです、吾人、又、別離の嘆なきにしもあらずです、然れども、吾人は徒らに婦女子の響を學ばぬで、諸君が榮譽の門出を祝して、今日の惜情を消し、諸兄が絶大なる責任を思ふて、以て、今日の離別を忘るゝで、否寧ろ歡喜するで、希くは諸君、健祥、自重以て、社會の鉄扉を排せよ、吾人亦精勵以て、諸兄が健闘の足跡を追はん。

謹で別辭となす。

## ○弓術部秋季大會報告

神無月神嘗祭佳節

秋高うして、馬肥ゆる時、金城追手の方に當りて、弦音高く聞ゆるは、敵の軍勢、雲霞の如く押寄せ來たるかと思はる、是れ、我校の、秋期に於ける弓術部大會なり、いでや、これより、當時の様をば、記し見む、但し、細事は、頁に限りあれば省き、名譽ある月桂冠を得られし諸氏の、芳名を記し申さむ。

### 點取競射 (五手)

- |           |        |
|-----------|--------|
| 一等 小木     | 二等 内藤  |
| 三等 奥山     | 四等 吉川六 |
| 五等 岩田     | 六等 鳥居  |
| 七等 延川     |        |
| 以上七名      |        |
| 數取競射 (五手) |        |
| 一等 佐々木君   | 二等 藤森君 |
| 三等 奥山     | 四等 影山君 |
| 五等 小木     |        |
| 以上五名      |        |

射割競射 (片矢)

第一回 無し

第二回 岩田

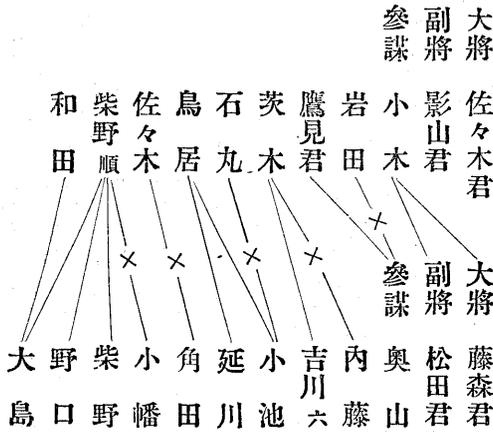
第三回 内藤

五寸的競射 (二手)

内藤、影山君、奥山、

右にて、各個人競射は終結を告げたり、これより、今日の紅白勝負を記さむ、遠き昔に於て、其名を武界に擧げたる、源平の大合戦は演ぜられたり。

白軍 紅軍



此合戦は、紅軍の軍勢多きにもかゝらず、遂に保元平治の乱となりしを是非もなや。(終)

○前雜誌部委員伊藤、池部

両兄を送る

金風習々として瀟氣慢ろに人に逼り森羅萬象一として淵衷の色を現はさるは無し、此時に當り前雜誌部委員伊藤、池部の両兄は綬を解き、管城子を鞘に封して退任せらる、寔に本會の爲めに悲嘆の情に堪へざる也、両兄や素より積極的活動力に富み、捷にして質實能く諸般の文爐を涉獵して圓滿に發達せる才識を傾注し、相倚り相輔け、其本領を發揮して一意専心本會雜誌の編輯に努力せらる、憶ふに両兄が能く四角八面に薙ぎ立て、觸るゝ處悉く粉壘したりし靈才と辣腕とは、げに天賦の資質を具備したる奇材逸足ならでは、いかでか能く斯の如くなるを得べき、適材を適所に置くてふ語は両兄に於て其妥當なるを見る、吾曹は窃に斯界の雙美として敬服したりき、さるを聚散離合は世の通慣とは謂へ、茲に両兄と離別せざる可からざるを想へば宛ら掌裡の珠を失ふ心地して、はらくと暗涙の頬を傳ふるを禁する能はず萬感交

々胸中を往來するも情凝り筆澁りて之を攄ぶるを得ず只  
余輩は両兄が既往の效績に向ふて深討すると同時に爾後  
益々卓越なる靈想を吐露し流麗なる才筆を呵して、燦然  
たる光輝を我紙上に放つに吝かならざらん事を望む、聊  
か記して離別の辭となす。

### ○本校規則中改正二件

今般本校規則中左の通り改正せられたり

▲第八章自第四十九條至第五十一條……………無給副手に關  
する條……………刪除

以下各條章順次繰上グ

#### 第十二章 研究生

第六十六條 研究生ハ本校卒業生ニシテ既修セル學科ノ一ヲ選ビ之レヲ  
研究スルモノトス

但シ本校卒業生ニアラザル志望者モ證議ノ上許可スルコトアルヘシ

第六十七條 研究生ノ定員ハ各學科三名以内トス  
但シ同一ノ學科ニ對シ志願者定員ニ超過スルハ卒業試驗全成績ノ優  
等ナルモノヨリ順次之レヲ許可ス

第六十八條 研究生ニハ授業料ヲ免除シ研究料一學年ニ付キ金拾圓トシ  
左ノ二期ニ分チ之レヲ納付スルモノトス

第一期十一月 金五圓

第二期四月 金五圓

但シ各學科ニ於テ一名ヲ限り研究料ヲ免除スルコトヲ得

(會報)

第六十九條 各期ハ研究料納附ノ月以後ニ於テ許可ノ者ハ十日以内ニ該

學期ノ研究料ヲ納附スベシ

第七十條 研究生ノ期限ハ二箇年以内トス

第七十一條 研究生ノ研究セント欲スル學科ハ主任教官ヲシテ擔當セシ  
メ該教官指導ニ從ヒ研究ノ業ニ從事スルモノトス

第七十二條 研究生ハ每學期ノ終ニ於テ研究シタル事項ヲ主任教官ヲ經  
テ校長ニ報告スルモノトス

第七十三條 學校長ハ研究生ノ申請ニ依リ研究ノ學科ニ對シ證明書ヲ交  
附スルコトアルベシ

第七十四條 研究生ハ徵兵令第十三條ニ依リ徵集ノ猶豫ヲ受クルコトヲ  
得サルモノトス

第七十五條 研究生ニシテ研究ノ目的ヲ達スル能ハスト認ムル者又ハ研  
究料ヲ納付セザルモノハ之レヲ除名ス

第七十六條 研究生ハ本規程ノ外總テ正科生ト全シク本校ノ規則ヲ遵守  
スベシ

本則第十二章ハ明治四十二年四月一日ヨリ施行ス

▲第七章第四十八條……………卒業生稱號ノ條……………中左ノ

一項ヲ加フ

明治四十一年以後ノ卒業生ハ其ノ修了シタル學科ニ從ヒ金澤醫學專門學  
校醫學士又ハ金澤醫學專門學校藥學士ト稱スルコトヲ得

……………明治四十一年十一月九日……………

### ○解剖屍體追吊法會

本校は去十一月十四日午後一時より市内蛤坂妙慶寺に於

て第十五回解剖遺體追吊法會を執行したり、導師大村心定氏の外僧侶十四名の莊重なる讀經あり、四隣闐として毫も聲響を漏さず、次で高安校長を始めとして各教職員及び遺族の焼香并に生徒總代の焼香あり、午後四時頃法會全く畢る、本日參詣せる者は學校職員一同、遺族數十名、及び生徒約二百名許なりき、因に今回の解剖屍體總數は六十四名にして、内三十八名は男、他二十六名は女なりき。

### ○小松原文相の來校

小松原文部大臣は赤司秘書官、眞野實業學務局長を隨へ北陸、幾内、和歌山、愛知等諸地方の學事視察の爲め當金澤へは十一月七日到着せられたり

翌八日は日曜日なりしが午前九時金澤病院へ到り全院及び全構内本校第二分教場にて詳細に諸般の視察を遂げ、猶全院隣接の當校新築敷地をも巡視ありたり 九日は第四高等學校及び本校第一分教場にて授業を觀、各教室、寄宿舎を視察せられ、午時大手町本校に來着せらる、直に會議室にて一行、本校教授と共に午餐をともにし、本校内各室の視察を終へられし後、濟々堂に於て教、職員一同に對し訓辭を玉れり其要は本校の教授上に付ては今茲

に言ふべき所なしたまた漸次進歩に應じたる設備、教育を施しつつあるべく、今後も協力して相勗めん事を望む特に生徒の訓育に就ては教、職員一致して其事に當られんを希望すと、かくて午後三時すぎ商業學校へ赴かれたり 當地に於ては直轄學校のほか縣立諸學校、市立女子職業學校、豎町小學校及び陶器會社、織物場等をも視察し、縣廳にて縣下教育上の調査を上げ、さきに文部省より表彰されたる縣下小學校教員を接見せられしと云ふ而して十一日當地出發富山へ向はる

\* \* \* \* \*

## 會 告

### ○明治四十年度十全會

#### 會計報告

### ◎四十年度十全會費収支決算報告

四十年度金澤醫學專門學校十全會費別紙ノ通り決算ヲ遂ケ候結果収入増金八拾六圓拾九錢六厘支出殘金八圓壹錢



第十全會雜誌第二十五號

(會告)

第一目 大會費	六・〇〇〇	*	一・九〇〇	三・六八〇	二四・八五〇	二・〇〇五
第二目 通常會費	二・〇〇〇		一・一〇〇	三・一〇〇	三・一〇〇	
第三項 雜誌部	四〇・〇〇〇		三・六八五	五〇・三八五	五〇・三七〇	〇・〇一五
第一目 雜誌費	四六・四〇〇		三・五五〇	四八・九八〇	四八・九八〇	
第二目 通信費	一五・〇〇〇	*	〇・七五〇	一四・八四〇	〇・〇四〇	
第三目 消耗品費	七・〇〇〇			七・〇〇〇	六・九八〇	〇・〇二〇
第四目 製本費	一〇・〇〇〇	*	一〇・〇〇〇			
第五目 雜費	一・〇〇〇	*	一・〇〇〇			
第四項 ロンテニス部	六〇・〇〇〇			六〇・〇〇〇	六〇・〇〇〇	
第一目 ロンテニス費	六〇・〇〇〇			六〇・〇〇〇	六〇・〇〇〇	
第五項 劍道部	五〇・〇〇〇			五〇・〇〇〇	四六・六五〇	三・三五五
第一目 大會費	二五・〇〇〇		三・六八五	二八・六八五	二八・六八五	
第二目 獎勵費	二五・〇〇〇	*	三・六八五	二二・三九五	一八・〇〇〇	三・三五五
第六項 柔道部	五〇・〇〇〇		五・四四五	五五・四四五	五五・四四五	
第一目 大會費	二五・〇〇〇		三・〇五五	二六・〇五五	二六・〇五五	
第二目 獎勵費	二五・〇〇〇		二・三六〇	二七・三六〇	二七・三六〇	
第七項 弓術部	五〇・〇〇〇		〇・六二〇	五〇・六二〇	五〇・六二〇	
第一目 大會費	一五・〇〇〇		〇・七九五	一五・七九五	一五・七九五	
第二目 備品費	三〇・〇〇〇		三・八八五	三三・八八五	三三・八八五	
第三目 南山修繕費	五・〇〇〇	*	四・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	
第八項 會務費	七九・五〇〇			七九・五〇〇	七九・五〇〇	〇・一六〇
第一目 備品費	三三・〇〇〇	*	一・九〇〇	二〇・〇〇〇	二〇・〇〇〇	〇・〇七〇

第二目 印刷費	〇・五〇〇	*	〇・五〇〇		
第三目 消耗品費	五・〇〇〇		三・九〇〇	八・九〇〇	八・九〇〇
第四目 雜費	七・〇〇〇	*	三・〇〇〇	三・九四〇	三・八五〇
第五目 茶話會費	四〇・〇〇〇		一・五〇〇	四一・五〇〇	四一・五〇〇
第九項 學術實習部	八〇・〇〇〇			八〇・〇〇〇	七六・六〇〇
第一目 藥品材料費	五〇・〇〇〇		三・一〇〇	五三・一〇〇	五三・一〇〇
第二目 備品費	二〇・〇〇〇		一・三〇〇	二一・三〇〇	二一・三〇〇
第三目 雜費	一〇・〇〇〇	*	四・五〇〇	五・四七〇	四・〇〇〇
第十項 豫備費	五・七〇〇	*	五〇・三〇〇	四三・六〇〇	四三・五〇〇
第十項 豫備費	五・七〇〇	*	五〇・三〇〇	四三・六〇〇	四三・五〇〇
第十項 端艇基金	一・〇〇〇			一・〇〇〇	一・〇〇〇
第十項 端艇基金	一・〇〇〇			一・〇〇〇	一・〇〇〇
第十項 借入金償還	二〇・〇〇〇			二〇・〇〇〇	二〇・〇〇〇
第十項 借入金償還	二〇・〇〇〇			二〇・〇〇〇	二〇・〇〇〇
第一目 還	二二四九・三三〇			二二四九・三三〇	二二四九・三三〇
合計	二二四九・三三〇			二二四九・三三〇	二二四九・三三〇

四十年度金澤醫學專門學校十全會  
樂器購求基金報告

名	稱	金	額
「ピアノ」	購入基金		九三、六四二

但三十八年五月二十五日協議會ノ決議ニ依リ同年度經

費剰余金ヨリ組入第一回春季陸上運動會へ繰替ノ分戻入

●四十年年度十全會校外特別會員

會費收支決算報告

四十年年度十全會校外特別會員會費收支決算ノ結果

本年度收入金額ハ 一、二六五、八六一ナリ内

自四十一年年度會費前納金額  
至四十五年年度會費前納金額  
前年度剰余金ニシテ四十一年度  
維持資金へ組入スヘキ額  
前年度剰余金ニシテ本年度維持  
資金へ組入額

ヲ扣除シ殘金 六三三、八〇〇

ハ本年度實收入金額ナリ 一二九、一六一

本年度支出濟額ハ 三八、五〇〇

ニシテ收入額ニ比シ 四六四、四〇〇

五〇四、六九四

ノ不足ヲ生シタリ此ノ缺損ハ會費未納者多キニ因ル故ニ繰越金繰替補充逐次翌年度剰余金ヨリ償還ヲ要ス

現在資金ハ三十七年度ニ於テ同年度以後ノ前納會費ヲ繰替第三回國庫債券額面貳百五拾圓ヲ價格金貳百參拾圓五拾錢ニ應募購入シ毎年度ノ剰余金ヲ以テ漸次償還ノ處今尙五拾六圓四拾錢九厘償還未濟ナリ依テ繰越金六百六拾

六圓貳拾五錢八厘ナリ  
右報告候也

明治四十年年度金澤醫學專門學校校外特別會員會費收入決算表

科 目	豫算額	收入濟額	豫算額ニ比シ		備考
			増	減	
第一款 金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費	一、二六五、八六一	一、二六五、八六一	〇	〇	未納者アリシニヨリ内參百拾錢ハ本年度以前々納ノモノ
第一目 會費	四、五〇〇	三、九〇〇	〇	一、八〇〇	未納者アリシニヨリ
第二目 前年度未納會費	八〇〇	三、四〇〇	〇	〇	未納者アリシニヨリ
第三目 前納會費	三〇〇	二、九〇〇	〇	〇	未納者アリシニヨリ
第二項 利子	三九、〇〇〇	四、四〇〇	〇	〇	未納者アリシニヨリ
第一目 預金利子	三九、〇〇〇	四、四〇〇	〇	〇	預金多キニヨリ
第三項 繰越金	三三、一〇〇	五、三〇二、九〇六	〇	〇	内參百四拾圓四拾錢ハ前納會費
第一目 繰越金	三三、一〇〇	五、三〇二、九〇六	〇	〇	百六拾七圓六拾六錢壹厘ハ前年度
合 計	一、二六五、八六一	一、二六五、八六一	〇	〇	剰余金



醫談	一三四	同	發行所
北海醫報	八〇三	同	北辰病院研究會
京都醫學會雜誌	五〇四	同	會
臺灣醫學會雜誌	七二七	同	會
產科婦雜誌	二〇七八	同	日本產科婦協會
日本助產婦新報	二二九	同	發行所
神經學雜誌	七〇八	同	日本神經學會
醫學中央雜誌	六六九	同	會
國家醫學會雜誌	二五八二五九	同	會
北越醫學會々報	一六六	同	會
中央醫學會雜誌	八二二	同	會
藝備醫事	一四九一五〇	同	社
岡山醫學會雜誌	三五六	同	會
廣島衛生醫事月報	一一八二九	同	社
鎮西醫報	二六	同	社
莊內醫學會々報	六七	同	會
藥學雜誌	三〇三二	同	會
藥石新報	五九六〇一二三	同	社
治療藥報	四二四	同	會
助産ノ槩	一五〇	同	緒方助産婦學會
千葉醫學專門學校校友會雜誌	四	同	會
醫事新聞	七九七〇	同	社

大日本耳鼻喉科會々報	一四〇五	同	會
好生館醫事研究會雜誌	一五〇五	同	會
皮膚科及泌尿器科雜誌	八〇三四	同	日本皮膚科學會
日本消化機病會雜誌	七〇三	同	會
臨床彙講	二六二九	同	醫學書院
眼科臨床醫報	三三三	同	北越眼科研究會
東洋醫事新報	二〇三	同	私立東京醫學部
福岡醫科大學雜誌	二〇三	同	編大醫學部
道修藥報	三三三	同	道修藥報社
大坂醫學會雜誌	二	同	會
球陽	一七	同	沖繩縣立中學校友會
體育	一八〇	同	日本體育會
龍南會雜誌	二七	同	會
「オニヒヨダクチルス」骨學		同	岡島敬治君
ウユルツブルヒ大學(一九〇八—一九〇九)講座科目表		同	田上清貞君

○自明治四十一年十月二十日校外十全會費納付調書  
至全 十二月二十二日

金額 期限  
金參圓 (自四十四年度三ケ年分)  
金參圓 (至四十三年度)  
氏名  
吉川友信君  
梶川甚一君

(會告)

聖

